

# 文書館だより

第8号

徳島県立文書館



「御国之絵図阿波国」国立史料館蔵

## 文化の森開園5周年記念展

### 「徳島の復興」

平成7年10月17日～11月19日  
21世紀館多目的活動室

敗戦後、連合国の占領下にあった日本では民主的諸改革がおこなわれた。GHQ資料をもとに徳島の戦後改革と復興の様子を紹介する。

## 企画展10

### 「雑誌に見る戦中戦後」

平成7年10月31日～平成8年1月28日  
横井家に残された雑誌を中心に、戦中戦後の世相を紹介する

## 企画展11

### 「江戸時代人の楽しみ―旅・芝居・俳句―」

平成8年1月30日～5月5日  
酒井家文書の資料から堺屋弥蔵という近世阿波の一地方商人の多彩で活発な文化活動を紹介する。

## 歴史講演会

平成8年3月9日(土)午後2時～4時  
蜂須賀重喜の改革  
―主君「押込」の慣行をめぐる―  
笠谷 和比古(かさやかずひこ)  
(国際日本文化研究センター助教授)

入場無料

文書館の展示について	2
古文書の世界	3
特集「文書館展示の歩み」	4
目次 東洋経済新報について	6
GHQ資料「徳島の復興」について	7

〔古文書の世界〕

# 蜂須賀全鎮の指令状

主任専門員 福田 憲 熙

レ

此書は徳島市大原町外籠の穂積  
 一弘氏から本館へ寄託された文書内の一  
 通です。初代藩主至鎮(家政の長男。幼  
 名は千松丸。前名豊勝・豊雄・忠吉・豊  
 住。法号は峻徳院)より父家政の侍臣穂  
 積弥一右衛門長吉(高二百石・隠居名閑  
 盛・正保二年十一月没)に対し、近日帰  
 国後に台所新築予定に付き、他の二名等  
 とよく相談の上、用材の注文や確保など  
 の準備を命じた文です。発信は、『阿淡  
 年表秘録』などにより、元和二年(一六  
 一六)二月の江戸からの帰国途中のもの  
 と推定されます。

### 解説文

以上

我等帰国候者十間四方程之  
 臺所可申為候条内々  
 得其意源太左衛門  
 作右衛門など談合候て  
 材木あつめ可置候柱ハ  
 いや谷貞光年貢の  
 材木可仕候引物は南方川木  
 之内二可有候ふき板ハ  
 上郡より出分一取候内  
 可仕候仍而注文仕用

意候て可置候 謹言

二月廿二日 至鎮(黒印)

穂積弥一右衛門とのへ

### 読み下し文

以上

我等帰国候え者十間四方程の  
 台所為り申す可く候条内々  
 其意を得源太左衛門  
 作右衛門など談合候て  
 材木あつめ置可く候柱は  
 いや谷貞光年貢の  
 材木仕る可く候引物は南方川木  
 の内に有る可くふき板は  
 上郡より出る分一に取り候内  
 仕る可く候仍而注文仕り用  
 意候て置可く候 謹言

二月廿二日

至鎮(黒印)  
穂積弥一右衛門とのへ

### 用語解説

内々 ①うちわ。内密。こっそりと。

②内報。③内心。真意。

得其意 承知して。納得して。

源太左衛門 山田氏。諱は宗時。初氏

桐原。隠居号不休。瑞雲院(家

政)代召出。高五百石。後に

高三百十二石加増。鉄砲組頭。

大坂の陣御供出陣。元和年間、

作右衛門

暇を願い出で大坂に住した。民沢氏。幼名伝七郎。梶浦藤六正範二男。諱は可三。隠居号ト也。慶長七年三月召出。高百五十石。後に高五十石、また高百石三度加増。俊徳院(至鎮)幼少時の付人・弓組頭・大坂の陣御供出陣。寛永元年二月没。

談合

①話し合うこと。談じ合うこと。②談合行為。

いや谷

美馬郡祖谷山(古くは祖山・弥山・伊屋山と書く)地方のこと。竹木は検地帳も作られ、貢租(年貢)の対象となった。

引物

①引出物の略。②引手。③鋸で切り割った木材。

ふき板

屋根を葺いた板。やねいた。阿波国の西部、吉野川上流域の汎称。広くは阿波郡以西、狭くは美馬郡と三好郡。

上郡

藩内の河口や港等に設けた御

分一

(五)分一所(税関)で搬出する物品に対して、分一銀(口銀)を取り、材木等は五分の一の現物を召し上げた。

とのへ

宛名につける敬称は、様↓殿↓との(平仮名)と敬意の程度が下がる。「との」と平仮名で書く場合は身分の下の場合に使う。

# いあいさつ

館長 大和武生

平成二年十一月三日の開館以来、本館では年四・五回の展示替えを行っていますが展示を欠かしたことはありません。博物館では当然なことではありませんが公文書等の収集・閲覧を本務とする文書館では異例のことです。

これは、本館が置かれた立場に由来するものであります。文化の森総合公園内に位置しているため、来館者のほとんどは旧県庁舎の重厚な建物に懐かしさを感じ何をすればいいかと足を運ばれます。

このように資料閲覧という館独自の機能を利用するために来館されたのではない多くの県民の方々に、文書館の存在を知っていただきたいという願望から「切れ目のない」展示の形態が決ま

りました。

「公文書館法」は、全国の自治体に公文書保存施設の設置を義務づけていますが、現在の日本にはまだ都道府県・政令都市などを中心に三十数館しか設置されていません。市町村に至ってはほとんどないのが現状です。

こうした状況下では、公文書の収集・保存という基本的業務と同様に文書館設置の必要性を広くアピールする方法として、展示を表面に出す時期だと痛感しています。

こうした事情をご明察のうえ今後とも文書館の展示に関してご意見ご指導をたまわりますようお願いいたします。

平成七年十二月一日

## 文書館展示について

文書館における展示は、博物館法に基づく施設の展示と異なります。博物館では、展示する「物に語らせる」ということが基本になりますが、文書館の展示は、文字を中心とする「記録資料」からどういふ歴史現実が分かってくるかということが常に課題として追及されなければなりません。

金銭借用書や離縁状について考えても、文書館の展示ではその資料の出所を問題にします。もし借用書が貸主の家から出てきたら借金は貸し倒れになった

次に文書館展示として留意すべき諸点を列記します。

一、展示の最大の課題は、何がテーマかを明らかにすること。どういふテーマを、誰に、どんな方法で訴えるかが展示の基本になります。

多くのテーマが存在する場合は、いくつか絞らなければなりません。余りにもテーマが多いと物事の本質を見失う可能性があるからです。しかしこの場合に留意すべきことは、展示者の解釈を一方的に押しつけるような材料の選び方は避けて、いろいろな資料を示して多彩な解釈を受けられる余裕を持たなければ展示に幅が出てこないでしょう。

二、展示を分かり易くすること。そのためには、次の諸点が要求されます。

- ① 館員自身が、展示の内容を十分に討論して主旨をよく理解する。
- ② 表記を易しくし、中学校卒業程度の学力で理解できるようにする。
- ③ 展示の解説、パネルなどは視覚的に鮮明なものにする。
- ④ 年表・事例などは、的確な省略・ゴチック文字使用などの工夫をする。
- ⑤ 文字の大きさ、展示の角度・高さ、照明の明るさ等を科学的に設定し、老人や車椅子利用者などの目線からも見やすくする。
- ⑥ 古文書の展示については、古文書を読めない人にも展示に主体的に参加してもらうために必ず「解説文」をつける。

三、資料を保存する立場から展示方法を工夫する。

展示は、資料の取扱についてどう注意しても、多少の劣化は免れません。そこで、どう工夫したら劣化を最少限にとどめることができるか。この課題を追い続けなければなりません。

鑑賞者に安心して見ていただくためには、ただ単に資料を損傷させるゼロタイプや押しピンなどの有害な用具を使用しないだけでなく、展示方法に細心の注意を払っているという実感を与える展示でなければなりません。

紫外線の影響を最少限にするために、窓ガラスに紫外線カットのフィルムを張り、ブラインドカーテンを装填し、光源を調整する。原資料の状況によっては複製品を作製して展示する。また展示用具を吟味し、必要があればその資料展示だけに限定した用具を開発する。などの配慮が必要です。

四、展示図録を作製する。

徳島県立文書館では、企画展示には必ず本格的な印刷による図録（八〜十二ページ・無料）を作製しています。資料紹介でも同様のものを作るか、最低でもワープロ印刷の図録を作製しています。これは展示場だけでは十分に理解していただくことが出来ないと考えられるからであります。

手造り図録は、少しの手間で作製可能ですが、(公) 文書館への理解を深めるためにも、来館者が持ち帰ることの出来る資料は有効であります。

本館の現実を踏まえながら「展示」について述べました。これらは単なる方法論ではなく「文書館はどうあるべきか」そのために「展示を館活動にどう位置付けるか」という課題から出発すべき問題と痛感しています。

(館長 大和武生)

企画展6 阿波の心学

― 大久保家文書を中心に ―

H 5・4・27 ~ H 5・8・1  
江戸時代の庶民教学として発達した心学を大久保家に残る資料を中心に紹介。

(図録⑦)



⑨

資料展6 黎明期の医学書 古川家文書

H 5・8・13 ~ H 5・10・17  
阿波藩の次席家老賀島家の侍医であった古川(ふるかわ)家に残されていた漢方・オランダ医学・本草学などの書籍を紹介。

(図録⑧)



⑩

企画展7 辰巳新田の開発

― 井上家文書を中心に ―

H 5・10・19 ~ H 6・1・30  
小松島の豪商鹿島屋井上家が開発した辰巳新田の開発の歴史と、現在の辰巳工業団地の現状を紹介。

(図録⑨)



⑪

資料展7 阿波の国絵図および国境図 Part II

H 6・2・1 ~ H 6・4・24  
ダイレクトプリントなどの複製により収集している絵図のうち阿波国絵図を中心に10点展示。



⑫

企画展8 近世小松島商人の蔵書

― 多田・西野家文庫を中心に ―

H 6・4・26 ~ H 6・7・31  
江戸期の徳島を代表する豪農・豪商であった多田・西野家に残された膨大で多種多様な書籍の中から時代状況を物語る資料を紹介。

(図録⑩)



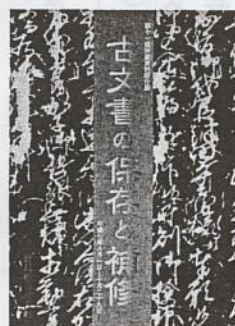
⑬

資料展8 中世城主上月家の花押

― 井口家文書を中心に ―

H 6・8・2 ~ H 6・10・30  
阿波では数少ない中世文書のうち本館の寄託されている井口家文書(県指定文化財)の中から花押を中心に紹介。

(図録⑪)



⑭

資料展9 阿波ゆかりの年賀状

H 6・11・1 ~ H 7・1・29  
年賀状の時期に合わせて、時代をあらわす蜂須賀家の年賀状や商家の年賀葉書などを紹介。

(図録⑫)

企画展9 徳島県の町村合併

H 7・1・31 ~ H 7・4・23  
昭和28年町村合併促進法に基づく戦後の徳島県の町村合併を県庁地方課所蔵公文書から紹介。

(図録⑬)



⑮

資料展10 徳島県下の広報誌

H 7・4・25 ~ H 7・7・30  
行政と住民を直接結ぶ橋渡しとして徳島県下市町村が発行している多彩な広報誌を紹介。

5周年記念展 徳島の復興



⑯

資料展11 古文書の保存と補修

H 7・8・1 ~ H 7・10・29  
文書史料保存のため文書の劣化・破損の原因や状態と保存・補修の手だてを紹介。

(図録⑭)

企画展10 雑誌に見る戦中戦後

H 7・10・31 ~ H 8・1・28  
横井家に残る膨大な戦中戦後の雑誌類から昭和初期から戦前・戦中・戦後の世相を示す資料を紹介。

(図録⑮)

H 7・10・17 ~ H 7・11・19  
文化の森総合公園開演5周年記念事業「戦後50年をみつめて」の共通テーマのもと本館の「戦後の復興」という取り組みを、GHQ文書と戦災復興関係の写真を使って展示をした。

(古文書係長 立石恵嗣)

### 特集 文書館展示の歩み

## 切れ目のない展示活動の試み

文書館の仕事や役割を知っていただくため本館では「切れ目のない」(空きのない)展示を合言葉に展示活動に力を注いできました。

2階の展示室において、本格的な企画展と、軽い所蔵資料紹介展の4本建てで、交互に3カ月ずつ、年4回実施してきました。

わかりやすく展示を見ていただくため企画展には「図録」(2頁)「資料展」にも解説資料(8頁)をめぐりに毎回作成してきました。

3カ月ごとの展示の準備はあたたかくおられることが多かったのですが、展示は文書館の仕事の貴重な記録ともなっています。

20回をこえた今、これまでの展示の歩みを振り返ってみたいと思います。

#### ① 企画展1 徳島県の成立―藩から県へ―

H 2・11・3～H 3・4・10

明治維新後、幾多の変遷を経て明治13年に徳島県が成立するまでの状況を紹介した開館記念展示。

(図録①)

#### ② 資料展1 蜂須賀家の書画

H 3・4・12～H 3・5・1

旧徳島藩主蜂須賀家の所蔵した書画を紹介。

#### ③ 企画展2 蜂須賀家家臣 渡辺家資料展

H 3・5・3～H 3・9・1

蜂須賀家譜代の家臣渡辺家の資料を中心に近世武士の生活を紹介。

(図録②)

#### ④ 資料展2 阿波の絵図 Part 1

H 3・9・3～H 3・10・27

国立史料館所蔵の蜂須賀家文書のうち阿波国絵図をダイレクトプリントした複製絵図を5点紹介。

第3回展示

#### 明治の留学

―井上家文書を中心に―

平成3年10月21日(土)～平成4年1月1日(日)



徳島県立文書館

第2回展示

#### 蜂須賀家家臣 渡辺家資料展

平成3年5月3日(土)～平成3年9月1日(日)



徳島県立文書館

開館記念展

#### 徳島県の成立

―藩から県へ―



徳島県立文書館

第4回展示

#### 山村庄屋の役割

―美馬郡西端山村・谷家文書―

平成4年4月23日(土)～平成4年8月31日(日)



徳島県立文書館

#### ④ 企画展3 明治の留学

―井上家文書を中心に―

H 3・10・29～H 4・3・1

明治初年徳島から英国に留学した井上驥太郎・辨太郎兄弟の関係文書を中心に明治という時代を紹介。

(図録③)

#### ⑤ 資料展3 小坂奇石作品紹介

H 4・3・3～H 4・4・26

本県出身で現代日本の代表的書家小坂奇石の書8点(本館蔵)を展示。

#### ⑥ 企画展4 山村庄屋の役割

―美馬郡西端山村・谷家文書―

H 4・4・28～H 4・8・23

阿波の山村庄屋に残る古文書の中から山間部の農村の生活の様子を紹介。

(図録④)

#### ⑦ 資料展4 阿波の引き札 横井家文書

H 4・8・25～H 4・10・25

江戸時代から商店の宣伝につかわれたカラフルな引き札を横井家文書の中から14点紹介。

(図録⑤)

#### ⑧ 企画展5 県庁の変遷

H 4・10・27～H 5・2・21

明治4年以後の徳島県庁舎の変遷を関係文書で紹介。

(図録⑥)

#### ⑧ 資料展5 戦中戦後の紙芝居

H 5・2・23～H 5・4・25

昭和初期から街頭の大衆芸として発達した紙芝居の歴史を所蔵資料を中心に紹介。

#### 黎明期の医学書

古田家文書から



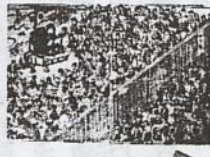
徳島県立文書館

第6回展示

#### 阿波の心学

―大久保家文書(渡島藩家臣)を中心に―

平成3年4月27日(土)～平成3年8月1日(日)



徳島県立文書館

#### 県庁の変遷

徳島県庁舎の変遷



徳島県立文書館

#### 阿波の引き札

所蔵資料紹介 横井家文書



徳島県立文書館

文化の森開園5周年記念展  
『徳島の復興』

平成7年10月17～11月19日  
於 21世紀館多目的活動室

【1】GHQ資料と戦後改革について

第二次大戦後、日本を占領した連合国はGHQ(総司令部)において間接統治をおこなった。GHQは日本の占領が終ると関係資料をアメリカ本国へ送り返し、現在はワシントン郊外のストランドにある公文書館別館で保管されている。

その内容は政治・民政・教育・援助など多岐にわり、占領期日本の実像を伝える第一級の歴史資料である。日本の国立国会図書館は、この膨大なGHQ文書をすべてマイクロフィッシュにおさめ一般の閲覧に供している。

本館では、このうちの徳島県と四国地方分の関係文書をマイクロフィッシュで収録した。現在、紙焼きをすすめ、文書目録の作成など閲覧にむけて準備をおこなっているが、作業が済み次第公開する予定である。民主的諸改革をはじめ、戦後日本の基礎をつくった時代のGHQが見た生々しい記録が収録されており、これからの研究・活用が大いに期待される。5周年展では農地改革・教育改革・行財政改革を中心に関係資料展示をした。

【GHQ資料のおもな内容の一部】

軍事占領活動報告・民事部活動報告・軍政部活動報告・賠償・国會議員選挙・知事選挙・町村長選挙・町村議会選挙・農業調整委員会・村長リコール・政党・県庁各課月例活動報告・嘆願書・請願書・生活保護・児童福祉・災害復興計画・男

女共学・農地改革・食料統制・教育調査報告・警察・裁判・公共事業・徳島の朝鮮人・道路・輸送・社会教育・婦人教育・復員・道路・輸送・公衆衛生・病院調査・福祉月報・その他

【2】復興写真について

徳島市は昭和20年7月の大空襲で壊滅的な被害を受けた。死者約一千名、被災家屋約一万三千戸、城下町の名残をとどめる町並みの約60%が燃え尽きた。

戦災復興事業は県の戦災復興都市計画事務所が担当して進められた。復興計画は、市内の幹線道路の拡張事業を根幹とし、駅前広場の整備、交差点ロータリーの建設、不良住宅の撤去などの整備事業が強制執行をともしながら遂行された。展示で紹介した写真は、昭和35年ごろ

徳島県戦災復興都市計画事務所が作成した『徳島の復興』という記録写真アルバムに貼付されているものである。本館に残されているものは『戦後の復興』2冊、『現場写真』3冊と表題がつけられている。戦後十数年が経過し、「もはや戦後ではない」といわれはじめた昭和30年代のはじめ、懸命に続けられた戦災復興事業も一段落した頃にまとめられたものとおもわれる。冒頭には「復興完了した徳島市」と記した眉山中腹からの眺望写真が掲げられており、事業の担当者の感慨が伝わってくる。終戦もない昭和20年代前半からの徳島市内の復興事業の様子が、仕事の記録として客観的に写しとめられたものだけに歴史資料として第一級の史的価値をもっている。



元町ロータリー付近の盆踊り 昭24・8・9



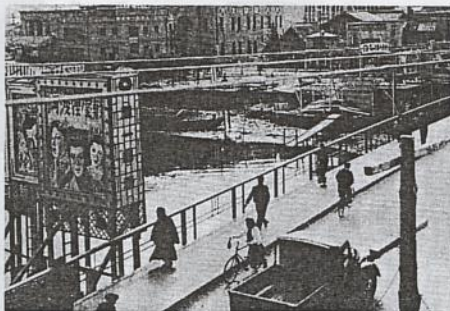
徳島駅前広場 昭26頃



徳島駅東側 昭27・3頃



県庁のワシントンヤシの移転 昭27頃



新町橋 昭27頃



眉山天神社下付近 昭24・8・9

### 第10回企画展 「雑誌に見る戦中戦後展」より

## 「昭和20年の東洋経済新報」

昭和20年、帝国主義・軍国主義のまっただ中の社会に、強い論調で自由主義の片鱗を見せていた雑誌があった。経済雑誌の雄であった「東洋経済新報」である。「東洋経済新報」は、明治28年11月15日に創刊され、その論調は一貫して自由主義であり、財政や経済の大勢を論議する「公経済」を得意としていた。戦中には、満州事変・日中戦争の全面化・日独伊同盟の締結にも一貫して反対の姿勢を示していたのである。

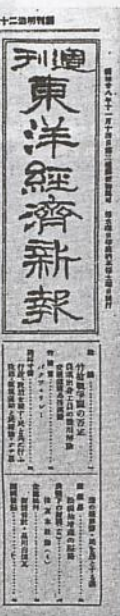
石橋は、主幹もしくは社長として統制の時代の中で自由主義的な健筆をふるっていたのである。昭和20年、雑誌のページ数は、8ページにまで減少していたが、経済雑誌らしく財界を後ろ盾に毅然と政府批判を繰り返している。

最も戦争が激しかった時期、中心になって編集にあたったのは石橋湛山であった。石橋は、大正13年に主幹、昭和14年から社長となった。「東洋経済新報」には、創刊以来「主幹」が社説や署名人りの論説を執筆する伝統があった。

今回「雑誌に見る戦中戦後展」で展示する横井家の雑誌資料の中には昭和20年だけで19冊の「東洋経済新報」が残っている。多少紹介してみよう。

3月31日発行の205号では、稲退蔵物資の動員について政府批判を行っている。第1点は、稲退蔵物資の範囲についてである。工場疎開など生産量の減少した軍需工場の中で停滞している原材料を含みこんで考えるべきであり、生産力増強こそが緊急課題であるとしている。第2点は、お役所的なかわりばえのしない物資回収方法に対する批判である。物資の回収と使用の両面から透明性をあげる必要性を説いている。現代でも課題とされている行政の透明性を問いているのが面白い。最後に、公定価格を中心とした物価政策につ

いての批判である。もし価格維持を続けるつもりならば政府の政策厳守の必要を記し、本来は物価政策自体の根本的な立て直し策が必要なることを述べている。統制が最高潮にあった時代にもかかわらず、政府の物価対策まで否定する内容になっていることに驚く。



東洋経済新報 昭和20年6月16日号

### 更生日本の門出 前途は實に洋々たり

八月六日のソ連の対日開戦宣言が其の進展を日本に於て迎えた。これを見て、記者は早稲穂は終結に近づき、政府は終戦の準備を急がねばならぬと警告した。この警告は、政府の準備が不十分であるからである。故に指導者にして国家の命運を握るものは、此の時機に於ては、如何なる準備も怠らざるを得ない。此の時機に於ては、如何なる準備も怠らざるを得ない。此の時機に於ては、如何なる準備も怠らざるを得ない。...

昭和20年8月25号

据え国民のえん戦感を知り、精神論のみのむなしさを説いている。むろん、間近まで迫っていた終戦を見据えた社説であったといえよう。

同8月25日発行の206号には、号外のかたちで一枚分を挟み込み、8月14日終戦詔書の全文をかけたあとに「更生日本の門出、前途は實に洋々たり」という見出しで堂々と終戦を肯定する解説を載せている。日本は米英のみを相手にしても既に戦争を遂行することは不可能だったと説き本土決戦を否定している。さらに非科学的な精神が蔓延したことこそが敗戦の原因であるとして、原子爆弾を例に科学的な考え方による産業の復興を求めている。最後に、今後の進路として世界平和の戦士として尽すことともに、物質的な意味だけではない科学的精神に徹していけば日本の前途は洋々であり、この文章は更生日本への祝辞であるとしている。このころまだ軍の一部は終戦阻止を叫ぶなど不穏な空気がある時期で、この文章を載せるにあたってはかなり勇氣が必要であったろう。

「東洋経済新報」は決して戦争を全面的に否定していたわけではない。しかし、「戦争の終結」という状況を作り出すには役立ったのではないだろうか。

この後、戦後すぐに石橋湛山は政界へと転身し（昭和21年5月第一次吉田内閣大蔵相）、昭和31年12月には首相にまで登りつめた。一方「東洋経済新報」は、昭和35年に「週刊東洋経済」と名をかえ現在まで続いている。（主事 金原祐樹）

# 文書館のあゆみ

平成7年3月8日～11月30日

7・3・8  
文書館協議会

3・3・10  
文書館資料調査員会議

3・11  
歴史講座九州共立大学助教 佐藤正志先生

3・17  
県内校誌交換会

3・23  
淡路西淡町菊川家文書資料受人(震災救援活動)

4・15  
読む会運営委員会

4・25  
第10回資料紹介展「徳島県下の広報誌」

4・26  
全史料協編集出版委員会(神奈川県)

5・13  
古文書講座開講(隔週土曜日10回実施)

5・14  
酒井家文書総合調査研究委員会(第1回)

5・17  
全史料協役員会(埼玉県)

5・26  
全史料協近畿部会総会(大阪府)

6・15  
第7回都道府県・政令指定都市公文書館長会議(東京都)

6・16  
全史料協専門職問題特別委員会(埼玉県)

6・26・27  
第17回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策  
研修会(東京都)

7・4  
全史料協編集出版委員会(神奈川県)

7・8  
シンポジウム「アーキビスト(文書館専門職)問題を考える(東京都)」

7・11  
文書館協議会

7・13  
文書館資料調査員会議

8・1  
第11回資料紹介展「古文書の保存と修理」

8・3  
文書資料保存研修会(4・10・11)

9・4  
全史料協専門職問題特別委員会(埼玉県)

9・12  
全史料協役員会(愛知県)

10・17  
歴史講座開講(毎月1回計5回)

10・17  
文化の森開園5周年記念展(11・19)

10・31  
第10回企画展「雑誌に見る戦中戦後」(8・1・28)

11・15  
全史料協全国大会(和歌山県)

11・15  
17

## おしらせ 平成8年度事業

- ① 古文書講座(10回)  
「古文書の解読入門」  
平成5月～9月 定員45名
- ② 歴史講座(5回)  
「文書に見る阿波の地域史」  
10月～2月 定員70名

- ③ 文書資料保存講座(4回)  
「古文書・公文書の保存と補修」  
8月上旬 定員30名
- ※各講座とも受講料は無料。受付は4月以降です。詳細は文書館へお問い合わせ下さい。

### 【表紙絵図説明】

「御国之絵図 阿波国」(国立史料館所蔵)  
江戸幕府は各藩に国絵図を数回にわたり提出させた。この絵図は袋表書きに4代藩主綱通様御代(1666～1676)とあり、明暦3年(1957)の大火で正保国絵図が焼失したため再提出させた絵図の控えと考えられる。十郡別に色分けされ、村名、村高、交通など幕府の基準にもとづいた記載がなされている。  
本館にはダイレクトプリントによる複製のカラー写真がある。(原寸276cm×263cm)

### 編集後記

\*文書館展示が20回を越えた。おわれながらも3カ月に一度の展示活動(図録作成も含めて)をよくこなし、についての議論はさまざまである。まだまだなじみのうすい文書館、県民の方々の意識の中に市民権を得るためにも続けていこうと思う。

\*文化の森総合公園開園5周年事業の「戦後50年を見つめて」記念展示は各館とも力作ぞろい。新聞やテレビ・ラジオも積極的にとりあげていただき、県民の関心も高く連日の大にぎわい。文化の森の活動に対する期待に確かな手応えを感じました。(恵)



### 文書館だより 第8号

平成七(一九九五)年十二月一日発行  
編集兼発行 徳島県立文書館  
〒七七〇 徳島市八万町向寺山  
文化の森総合公園内  
TEL (〇八八六)六八一三七〇〇  
印刷 ㈱教育出版センター